

第4回OCH Alumniセミナー

日程 2024年3月23日(土) 12:30開始-18:10修了 19:00-21:00 懇親会
場所 沖縄県立中部病院 第1・第2会議室およびZoomによるハイブリッド開催

OCHがこれからの社会に果たす役割を考える

救急医療における進化と深化を目指して

救急医療は沖縄県立中部病院の研修にとって重要な役割を果たしているため、伝統を維持しつつ進化と深化を遂げるために研修医と指導者に必要なことをディスカッションする。

司会 1 森下幸治 OCH33期 (東京医科歯科大学救急災害医学分野教授)

司会 2 山口 裕 OCH33期 (沖縄県立中部病院救急科副部長)

演者 1 木全俊介 OCH44期(沖縄県立中部病院救急科医長)

演題 中部病院 救急の現状

中部病院 救急室の現状として救急受診者数の推移、救急車数の推移、救急専攻医数の推移を報告し現状の問題点を共有した。現状の問題点としては、後期研修終了後スタッフとして定着する医師が少なくスタッフ数が足りないこと、救急受診者数減少に伴い初期研修医教育の質・量が低下していること、自科で行う中部病院救急後期研修医教育に習熟が必要であることなどが挙げられた。最後にそれらの課題に対する私見をまとめ議論につながる内容とした。

要旨

演者 2 大久保雅史 OCH39期 ピッツバーグ大学 Clinical Assistant Professor

演題 Introduction to Emergency Medicine Residency in the US

アメリカにおける救急レジデンシー(研修医)教育及び研修終了後のキャリアパスに関して演者の経験をもとに報告した。卒後研修を管轄するACGMEにより具体的な研修内容を制定されており、標準的な救急医療を独立して行える救急医が3年もしくは4年間で育成されている。

要旨

演者 3 森下幸治 OCH33期 (東京医科歯科大学救急災害医学分野教授)

演題 救急医療 伝統を守り進化と深化を遂げる

日本の救急医療には、多く分けて2通りの救命型とERがある。沖縄県立中部病院でのER型の研修を経験、および東京医科歯科大学の救命型を経験を踏まえ、両者の利点、欠点を報告した。また、救急医学学会の全国調査の結果も報告し、救急医療にはダイバーシティの重要性も報告した。

要旨

質疑・要約 現在の現状(すべての救急車の搬送要請を受け入れておらず不応需が発生している)に対する反響が大きく、現在の救急医療体制についての議論と解決策についての討議に時間を割いた。質疑時間が限られていたため、事前アンケート(どんな救急医になりたいか?)を施行、結果を会場、同窓会メーリングリストで共有した。

message 1 伝統を維持する: 病歴身体所見を重視した救急患者診療を通してOJTで研修医を育てる

2 進化を遂げる: 日本の救急科専門医プログラムから見た弱点(集中治療等)を強化する

3 強化の方策として同窓会のネットワークを活かす(短期研修、コンサルタント)

4 深化を遂げる: 北米型救急医療(初期診療)の質を高める

特別講演	医師の働き方改革-医療の質を維持するためにできること
司会	本竹秀光 OCH15期 (沖縄県病院事業局長)
演者	望月 泉先生 (八幡平市立病院統括院長)
働き方改革と研修医教育	
救急医療は沖縄県立中部病院の研修にとって重要な役割を果たしているため、伝統を維持しつつ進化と深化を遂げるために研修医と指導者に必要なことをディスカッションする。	
司会 1	本竹秀光 OCH15期 (沖縄県病院事業局長)
司会 2	照屋周造 OCH41期 (沖縄県立中部病院総合内科医長、腎臓内科)
演者 1	新嘉喜映佳 OCH43期 (沖縄県立中部病院新生児内科医員)
演者 2	姫岩翔子 OCH57期 (沖縄県立中部病院外科専攻医)
<p>要旨 働き方改革セッションではまず、はじめに望月泉先生(八幡平市病院事業管理者・統括院長)のご講演を賜った(13:35-14:05)。講演では働き方改革に関するルールのおさらいと、具体的な対策、中でも宿日直許可、業務と自己研鑽をどうわけべきか、タスクシフトはどうあるべきか、の原則についてお話をいただいた。その後、会場参加型の仕組みを用いて本竹秀光病院事業局長(15期)、照屋周造(41期 腎臓内科)、新嘉喜映佳(43期 新生児科)、姫岩翔子(55期 外科専攻医/次期チーフレジデント)の4名を中心に議論を行った。</p> <p>議論の中では研修医の成長には症例数や手技の数が不可欠、時間や数が限られた中で質を上げるための仕組みなどについて姫岩医師の意見を聞きながら詳しく話し合った。またワークライフバランス、中でも出産や子育て、医師の家族からみた医師の働き方について新嘉喜医師からこれまでの歴史とこれからの姿についてコメントしていただいた。その他、スタッフの負担増、患者負担について、制度の悪用をどう防ぐか、公務員の副業、やる気のある研修医に対する自己研鑽の取扱い、オンデマンド学習を含めた非同期の学びなど話題は多岐に及んだが時間の都合もあり、終了となった。</p> <p>特に印象に残った言葉は、働き方改革が医療の質を下げてはいけない、働き方改革が研修を妨げてはいけない、という信念をあらわす言葉であった。このような信念をもとに、具体的な方策を話し合う時間ももっと欲しかった。</p> <p>救急医療セッション、総合診療セッション、外科セッションでも語られたことではあるが地域住民、地域の医療従事者と協働しながら中部病院のあるべき姿を模索するとともに、県内外、国外の医療機関に勤務する卒業生の力を借りながらより良い研修制度を作り続ける覚悟を固めなければならないと感じた。(文責：照屋周造)</p> <p>望月先生のご講演で、「働き方改革で研鑽を妨げてはならない」という言葉が印象的でした。しかし、働き方改革の公的文書からはその理念は伝わってきません。研修医も指導医側も時間制限のルールを破らないように意識がむきがちなので、研修医が自己研鑽を主張できるためにも研修医側へも働き方改革に関する教育が必要と感じました。また、このセミナーを通じて活躍している卒業生の話を聞くことで、自分に必要なスキルや知識を見極めることができ、それが自己研鑽に繋がるのではないかと感じました。(文責：新嘉喜映佳)</p>	
message1 働き方改革の中で研修医が成長するための仕組みを作る	
2 中部病院が地域で求められている役割を考え、働き方改革の中でも実現する方法を考える	
3 卒業生、地域の医療機関との連携を深め、より良い研修制度を模索する	

21世紀のニーズに応える総合診療の深まりと広がり

これからの高齢社会と人口減少社会に向けて、沖縄の離島や在宅医療を含めた地域医療のニーズを解決するにはどうしたらいいのでしょうか。これまで中部病院は急性期医療の臨床能力の高い総合診療医を多く輩出してきました。しかし、現在は急性期医療の対応から、慢性期、継続診療の対応のニーズが高まっています。地域ケア（地域包括ケア/地域共生社会の構築）も含めて、これからの中部病院の総合診療科の役割（教育と実践（離島支援も含む）、臨床研究）について考えたいと思います。

司会 1 山城清二 OCH18期（あさひ総合病院内科/総合診療科、富山大学総合診療科名誉教授）

司会 2 尾原晴雄 OCH34期（沖縄県立中部病院 内科部長）

演者 1 長嶺由衣子 OCH43期（厚労省老健局老人保健課 課長補佐）

演題 地域における中部病院の課題と地域包括ケア

要旨 2023年夏に、中部病院・沖縄県の医療・介護現場にて、中部病院が果たす役割の現状把握のためのインタビューを行った。そこでは、急性期患者を受け入れきれていない、なるべく早い転院支援が必要、地域内の慢性期・回復期病院の状況把握と支援が必要といった問題点が抽出された。また、背景にある日本、沖縄の人口構造や未婚率の変化や、国が目指そうとしている地域包括ケアシステムの動向と、その構築に向けた各地域の先進的な取り組みなどを紹介した。

中部病院が抱える問題の対応案としては、地域の医療機能の役割分担（輪番制導入、入院基準の見直しや、訪問看護・訪問診療との連携など）を行い、近隣機関との顔の見える関係性の構築をすすめたい。合わせて、病院医師の在宅医療への理解を深めるための研修を強化し、特に研修医に対しては近隣の慢性期、回復期病院等への医療支援を経験することで、多様化する医療ニーズを理解し、実践できる能力を身につけてもらいたい。加えて、沖縄県での地域包括ケアの発展のためには、専門職を主語にするのではなく、患者本人、家族を中心にどのような地域、連携を作る必要があるかを考える必要がある。

演者 2 新村真人 OCH52期(栗国診療所 総合診療専攻医4年目)

演題 離島での経験を活かし、中部地区の地域医療問題に取り組みたい

要旨 前半は栗国島でおこなった急性期在宅医療のとりくみについて紹介し、後半は中部地区が抱える医療問題(病床逼迫)を急性期在宅の取り組みを通して改善できないか、と提案するという流れで発表した。

高齢化が進んでいる栗国島では、多職種で高齢者を見守り、医療介護福祉が顔の見える関係で連携する地域包括ケアシステムが上手く機能している。特養や在宅で年間20例ほどの腎盂腎炎が発生する。入院外の治療を希望する患者がいた際に、尿路の閉塞がないことや酸素投与および昇圧薬の投与が必要ないことを確認し、在宅や特養での抗生剤治療をおこなったところいずれも大きな合併症なく治療を完遂することができた。中部病院では年間370件程度の腎盂腎炎の入院があり、平均在院日数は13日を超え、病床逼迫の要因となっている。急性気在宅の取り組みは欧米で先んじて行われており(hospital at home)、入院治療と比較して、再入院率を下げたり、入院関連費用が起こりにくいなどの報告もある。

中部病院でも腎盂腎炎を入院外で治療する取り組みをおこなえば、様々な成果を見込めるかもしれない。ただし、適切な患者の方法、院内外での運用方法など課題は多い。

演者 3 山城清二 OCH18期（あさひ総合病院内科総合診療科、富山大学総合診療科名誉教授）

演題 地域包括ケア・地域共生社会を目指して～人材育成・住民参加を中心に～

要旨 前半は医療崩壊した南砺市での地域医療再生からまちづくり（地域包括ケア/地域共生社会）の取り組み、そして後半は総合診療科における医師養成について紹介しました。

地域医療再生とまちづくりの取り組みの要点は、地域での人材育成と住民参加型システムでした。その地域の医療機関で医師、看護師、介護士などの医療人が育つ仕組みでは、特に医師養成では初期研修医および後期研修プログラムを立ち上げて少しずつ人数を増やしていきました。また、住民は活動に参加することにより、地域の課題を自分事とし自らも行動し、その活動を活発化してきました。つまり、マイスター養成講座、地域医療を守る会、各グループ活動、そして行政のサポートの10年間の取り組みで、医師や看護師等の増加と住民活動の活性化をもたらしました。

総合診療科の医師養成では、大学と地域の病院が連携し総合診療医養成プログラムを立ち上げ、それぞれの場によって医師が育つ臨床や教育の体制を整えてきました。2010年からの総合診療医養成プログラムでは、14年間で30名以上の総合診療医が育ちました。特に病院外では、診療所での診療と在宅医療も強化してきましたので、大学と地域医療機関との連携がポイントになりました。

今後の高齢社会では、地域と連携した医師養成と住民参加がますます重要になると思います。優れた臨床医を多く養成してきた中部病院には、地域のニーズの沿った臨床・教育そして研究活動に期待します。

質疑・要約

- ・ 地区医師会との連携については？ 地域の医療資源、ニーズを踏まえながら、中部病院ならではの在宅医療（急性期在宅）の提供を考え、また教育の場としても利用できるものを構築したい
- ・ かかりつけ医としての関係性がないところでどのように信頼を得るか？ 難しい問題であるが、住民へのアプローチも行い、広く認知され、受け入れられる仕組みを目指す
- ・ 急性期在宅医療は、中部病院での学びが活かせる分野であり、まさに救急での研修そのものとも言える。在宅医療において活躍する卒業生も増えており、ネットワーク構築も可能だろう

message 1

- ・ コロナ禍の経験、離島で提供されてきた地域ケアを踏まえ、中部病院の強みである総合診療、救急の対応能力を生かした急性期在宅の試みが始まろうとしている
- 2 ・ 地区医師会、行政との連携、地域住民へのアプローチも行いながら、全国でのモデルとなる仕組みづくりを目指し、総合診療の教育・研究の場としての充実を目指していく
- 3 ・ 中部病院で学び、離島で経験を積んだ総合診療医が、再び中部病院の中を集ってホームグラウンドを作ることにより、病院内に留まらず地域に出て行く総合診療の教育、実践が可能となる

中部病院のGeneral Surgeon育成プログラムについて

中部病院の一般科研修の良い点、改善点について、各専攻医の経験を踏まえて考察し、より良い研修プログラムの構築を目指さず。

司会 伊江 将史 OCH37期 (沖縄県立中部病院 外科部長)

演者 1 栗林 宏次 OCH54期 (弘前大学外科専門研修プログラム 外科専攻医 2 年次研修中)

演題 外科医としての自分を弘前でみつめなおしてみた

要旨 大学病院という新しい環境で研修することで、自分自身の特性を認識し、セルフコントロールの術を学んだ。

術前の準備やチーム内での情報共有の重要性を学んだ。

集約化された大学での研修は、定型手術を効率的に学ぶことができる。

演者 2 横溝 玲奈 OCH53期 (OCH外科専攻医 3 年次 沖縄県立宮古病院)

演題 離島研修を終えて、GeneralistかつSpecialistであるために

要旨 離島研修ではGeneralistとして幅広い疾患に対応できるスキルを身に着けることができた。

エキスパートの招聘やweb講義などを活用するなど、専門的知識・技術の習得には工夫が必要。

演者 3 千田 航平 OCH52期 (2022年度 弘前大学外科専門研修プログラム修了 現Roswell park comprehensive cancer center)

演題 中部病院の後期研修中にあえて大学で研修を行う意義はあるのか？

要旨 中部病院の研修は短期間で一般外科医としての知識と技術を身に着けることができる。

背景の異なる施設で研修することにより、新たなメンターとの出会いがあり、成長の促進の機会をえることができる。

専門分野研修の一部は、集約化施設と協力して行うことも必要。

質疑・要約 離島の研修では幅広い外科系疾患に対応できるスキルを身に着けることができる。一方で専門的スキルの習得には課題が残る。

集約化された研修施設との連携は、専門的スキルの習得の解決策の一つとなり得る。

message 1 中部病院は限られた期間 (2 年) で離島の一般外科診療を担う専攻医を教育することができる。

2 他施設との研修を連携により、専攻医がより多くの経験をし、成長の機会を得ることができる。

特別講演 アメリカへの挑戦と未来の多様な医師キャリア

司会 宮城良充 OCH6期 (OCH同窓会理事、事務局長)

演者 町 淳二 OCH11期 (ハワイ大学外科教授)

SNS・IT普及のこの時代、海外にわざわざ行く・アメリカに挑戦する意味あるのか？

未来の世界は、未来の医療はどうなるのか？

混沌とした世界・日本、多々の問題をどう解決する？ 医師がすべきこと？医師ができることは？どんな医師になれるのか？

コロナとともにNew Normalな社会。しかしそれ以前からのIT, AIなどのScienceの発展・進化のお陰で医療は大きく変革している。一方で、世界には様々な問題が山積。医療問題は気候も含めた環境問題、貧困・差別問題、エネルギー・資源問題、平和・公正の問題など多種の分野にも関わる。そのような世界や医療の変革の中、医療者特に医師の役割も大きく変わる (医のアートの重要性) ・多様化することとなるでしょう。

要旨

この講演では未来の医療さらに未来の世界を予見し、今から何をすべきか、どんな可能性があるか考えましょう。特に皆さんのキャリアの多様性、それを見定めるための手段の一つとしてのアメリカ挑戦の意義も提示します。

また、私が若者であった頃から夢を追い続け、長年日米で医学教育と医師育成に携わっている私の足跡と未来の夢も紹介させていただき、皆さんら次世代に夢を未来を託したいと思います。

講評**安次嶺馨 OCH 3 期 OCH同窓会理事長**

第4回OCH アラムナイセミナーは2024年3月23日に、中部病院第1・第2会議室および ZOOMによるハイブリッド形式で開催された。会場参加者34名、Zoom参加者54名であった。

今回のテーマは「OCHがこれからの社会に果たす役割を考える」で、次の4部門について討論した。

- 1 救急医療における進化と深化を目指して
- 2 医師の働き方改革-医療の質を維持するためにできること
- 3 21世紀のニーズに応える総合診療の深まりと広がり
- 4 中部病院のGeneral Surgeon 育成プログラムについて

特別講演として望月泉先生（八幡平市立病院統括院長）の「働き方改革と研修医教育」、町淳二先生の「アメリカへの挑戦と未来の多様な医師キャリア」も行われた。同窓会事業部会を中心とする企画メンバー OCH16期内原俊記、20期袴田健一、22期篠崎裕子ら）の熱い思いを感じさせる5時間に及ぶ濃密なセミナーであった。各部門の討議内容は、「まとめ」に的確に要約されている。しかし本来なら各部門だけで、1日のセミナーになる分量であり、今後はこれらのテーマについて、さらなる議論を深める必要がある。参考までに、これまでのアラムナイセミナーの歴史について、この機会に記しておきたい。長年、ハワイ大学の研修プログラムの責任者を務めたSatoru Izutsu 先生が、その任務を町淳二先生に委譲した時、私と町先生は中部病院の研修制度を再活性化させたいという思いで、定期的に同窓会でセミナーを開催することを考えた。町先生の提案で、「中部病院研修未来の会（仮称）」を立ち上げ、2017年11月10日に、Kickoff meeting を開催した。会場は中部病院の第1・第2会議室で、2時間半の会議の前半は5人のスピーチが行われ、後半は、今後の活動について活発な討議が行われた。これを受けて、第1回セミナー（2018, 10.13~14）は感染症、第2回（2019, 3.17）は医学教育、第3回（2019.10.5）は東京開催で救急医学を取り上げた。

ところで、私は2017年のKickoff meetingで「中部病院卒後臨床研修の歴史—その光と陰」と題して、中部病院で卒後研修を開始した1967年以後の歴史をふりかえって、「天地人」というキーワードで語った。

「天地人」とは、世界を形成する要素としての天と地と人、すなわち宇宙空間に存在する万物をさすものと考えられる。

孟子（紀元前372~290）は、戦に勝利するために、「天の時、地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と述べた。いくら天の時（運勢）に恵まれても、地形の有利さには勝てない。地形の有利さはあっても、人の和には勝てない」として、人々の強い絆こそが勝利の最大要因と説いた。

太平洋戦争後、日本本土から分離されて米軍統治下に置かれ、最悪の医療状況にあった沖縄は、天の時も、地の利もなかったが、ハワイ大学プログラムが開始された1967年に、高い志と熱い思いを持った人々の強い絆があった。ゴルト団長、真栄城優夫先生、宮里不二彦先生を中心とした指導医と研修医たちがいた。沖縄の医療を担うのは我々であるという責任と誇りを持つ集団だった。その後、日本復帰を経て、中部病院の研修制度は全国的に広く知られ、日本を代表する研修プログラムという評価がなされた。爾来50余年、現在の中部病院を取り巻く環境は激変した。今、私たちは、どのような「天の時、地の利、人の和」を持っているのだろうか。胸に手を当てて考えてみたい。過去の栄光にすぎるのではなく、今、私たちに何が求められているか、何をなさねばならないかを真摯に考えたい。

第4回アラムナイセミナーは、そのようなことを考える機会となった。「OCH がこれからの社会に果たす役割を考える」というテーマのもとに、4部門にわたって熱心な提案、討論がなされた。研修医から教授職まで、同じ土俵で課題に取り組んだ。今後のセミナーで、さらに議論を深めれば、中部病院が社会に対して大きな役割を果たす日が再び来るであろうと感じた。

ただ、今回は年度末の開催であったため、研修医、スタッフともに参加者が少なく、この充実したセミナーを多くの人々と共有できなかったのは残念であった。懇親会は、アラムナイメンバーが絆を強める良い機会なので、多くの人々が参加できるよう、次回の開催時期をよく検討したい。

懇親会 春日観光ホテル宴会場

参加登録者67名 会場参加者 34名、Zoom参加者 54名